

# 酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料 — 目的と出版地からの分類分析 —

## Investigation report on “OURAIMONO” documents of Sakata City KOKYU BUNKO possession — Classification analysis by the purpose and the publication place —

郡 千寿子\*  
Chizuko KOHRI\*

### 要 旨

山形県酒田市立の光丘文庫に所蔵されている文献資料について調査を行い、特に近世期江戸時代に作成された往来物資料の所蔵状況について検討考察した。その結果、かなりの所蔵—総数163本—が確認でき、全容解明には時間を要することが判明した。本稿では、その所蔵状況について目的別の9種類に分類整理の上、報告し、加えて版本の出版地域に着目した調査結果を提示した。継続的に行ってきた、北東北地域—弘前市立図書館所蔵・八戸市立図書館・岩手県立図書館・秋田県立図書館—所蔵の往来物資料と比較すると、多数多種の資料を有することや特に関西文化圏—京都・大坂—からの文献資料の流入が明らかとなった。地域における資料の偏在状況と、資料の分類整理を通してみえてきた諸特徴についての一面を提示し、それぞれの地域における教育環境や文化的背景の共通点や相違性など、新たな視点からの研究の可能性を示唆したものである。

キーワード：往来物、出版文化、庶民教育、関西文化、本間光丘

### 1 研究の方向性について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究<sup>1)</sup>をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版されている。

従来の往来物研究は、教育史資料という側面が大きかったが、人間文化形成に果たした役割や社会に与えた影響など、多くの未開拓課題が残されており、新たな視点からの活用が期待されている。

日本社会の近代化に往来物資料が、大きく関わっていたことが予想されるのであるが、文献資料の基礎的研究をはじめとして、その発掘も未だ十分にはすすんでいない現状にある。そうしたことをふまえて、東北地域の往来物資料調査を通して、近世期の庶民生活の一面や教育的背景について考えてみたいと思っている。

本稿では、山形県の酒田市立光丘文庫所蔵の文献資料調査から、どういった往来物が所在しているのかについて紹介し、分類と整理<sup>2)</sup>を試みた結果を提示した。酒田市立光丘文庫所蔵資料の調査に先立ち、すでに弘前市立図書館、八戸市立図書館、岩手県立図書館、秋田県立図書館が所蔵する往来物資料についての文献調査<sup>3)</sup>を行なっている。原則として、写本は除き、版本に限って、成立時期や出版元を確認し、それらを目的別と出版地別に分類整理して所蔵資料の特徴について考察検討を続けている。

写本を除いたのには意味がある。この研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本はもちろん、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。すべてを詳細に検討

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

するよりも、大要を明らかにするために調査資料をより限定して考察検討する方法をとった。

基本的には、従来の調査手法を踏襲し、酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料を調査することにし、分類整理を試みたい。また、従来の研究成果—弘前市立図書館・秋田県立図書館・岩手県立図書館の所蔵資料調査結果—との比較検討を必要に応じて交えながら、酒田市立光丘文庫所蔵資料の特徴的な一面について明示してみたい。それぞれの地域における往来物資料の調査結果を基礎として、今後、地域の教育環境や文化特性などの考察検討につなげてゆきたいと考えている。

## 2 酒田市立光丘文庫について

山形県の酒田市にある光丘文庫について少し紹介しておきたい。市立図書館分館の形態をとっている光丘文庫は、その由来に特徴<sup>3)</sup>がある。

1758(宝暦8)年、本間家三代目の当主、光丘は、修学のために文庫を兼ねた寺院の建立を江戸幕府に願い出たが、果たされなかった。本間家は、「天下第一の豪農」として庄内藩十四万石の大地主であり、「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」とうたわれ、「金銀財貨は積んで山の如く、伊呂波四十八蔵の倉庫には、累々たる米俵、金銀・銅貨・紙幣・古銭等その数算するに能わず」とまでうわさされた羽後酒田の本間家で、中興の祖が三代目の光丘である。その意志を継いだ八代目当主光弥は、先祖伝来の蔵書2万冊と建設費及び維持基金を寄贈し、1925(大正14)年、財団法人光丘文庫を設立した。その後、建物と蔵書等が酒田市に寄付され、事業が引き継がれている。文庫の建物は施工設計などに特徴があり、1996(平成8)年には本館、附属家具、室内装飾品が酒田市指定文化財となっている。

所蔵の国書は、本間光弥氏をはじめとして元私立酒田図書館、福利館、個人諸氏からの寄贈によるもので、本間家三代光丘以来の蔵書が中心となっている。近世以降の稀観本が多く見られ、文学、歴史書の中には江戸時代中期以前の刊本、写本が多く収蔵されている。

そうした背景をもつ光丘文庫において、今回は、往来物資料の所蔵状況についての調査を行った。以下に報告するようにならぬ文献資料が存在していることを確認することができ、今後、詳細に研究をすすめてゆく必要性があると思われる。

## 3 光丘文庫所蔵の往来物資料について

### 3-1 目的別分類状況

光丘文庫所蔵の文献資料調査の結果、往来物資料と判定した近世期版本は、総数163本であった。他にも、近代明治期以降に出版された往来物資料や書写本を含むとすると、かなりの所蔵数が確認される。分類するにあたって、理数科往来<sup>4)</sup>については、理学型〔天文・地学関係・生物関係・窮理(物理)関係〕と算数型を含むものと考えた。植物・本草関係についての文献資料も、多数の所蔵が確認されたが、ここでは理数科往来に含まないものとして分類整理した。

それぞれの詳細な書誌調査と内容分析は、今後の課題であるが、今回の基礎調査を通して、北東北の他地域—弘前市立図書館・岩手県立図書館・八戸市立図書館・秋田県立図書館—には所蔵が見られない文献資料が確認されたことや所蔵資料の出版地についての調査結果は、特に注目に値するといえるであろう。

往来物資料と認定した所蔵文献について、目的別—教訓科・社会科・語彙科・消息科・地理科・歴史科・産業科・理数科・女子用—の9種類に分類整理し、【図1】にグラフ化して割合を示した。グラフ中の番号は、①教訓科往来、②社会科往来、③語彙科往来、④消息科往来、⑤地理科往来、⑥歴史科往来、⑦産業科往来、⑧理数科往来、⑨女子用往来、をそれぞれ指すものである。

#### 〔目的別分類〕

① 教訓科往来	25本
② 社会科往来	2本
③ 語彙科往来	4本
④ 消息科往来	32本
⑤ 地理科往来	3本
⑥ 産業科往来	10本
⑦ 歴史科往来	12本
⑧ 理数科往来	33本
⑨ 女子用往来	42本

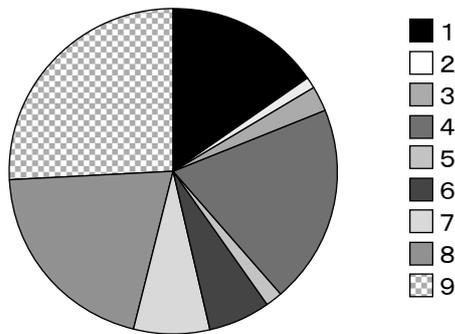
総数163本のうち、最も多いのは⑨女子用往来の42本であり、次いで⑧理数科往来33本、④消息科往来32本と多数多量の所蔵が確認できた。また、①教訓科往来25本、⑦歴史科往来12本、⑥産業科往来10本とこれらの種類もある程度の数の資料が所蔵されていた。③語彙科往来4本、⑤地理科往来3本、②社会科往来2本と、これらの種類の資料も少ないながらも所蔵が確

認できた。つまり、光丘文庫においては①～⑨までのすべての種類にわたる文献資料が所蔵されていたことが明らかとなった。

後掲の【図1】にそれら目的別に分類した資料の所蔵状況についてグラフで示したが、①教訓科往来は25本で15.3%、②社会科往来は2本で1.2%、③語彙科往来は4本で2.5%、④消息科往来は32本で19.6%、⑤地理科往来は3本で1.8%、⑥歴史科往来は12本で7.4%、⑦産業科往来は10本で6.1%、⑧理数科往来は33本で20.2%、⑨女子用往来は42本で25.8%となる。

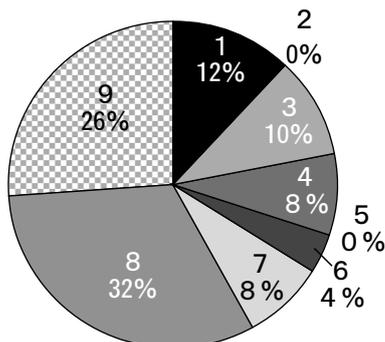
この所蔵状況について、これまでに調査した地域一特に対象文献資料が多く所蔵されていた地域一秋田県立図書館および弘前市立図書館一の状況<sup>5)</sup>と比較し、考察検討してみたい。

【図1 酒田市立光丘文庫所蔵資料における目的別分類割合】



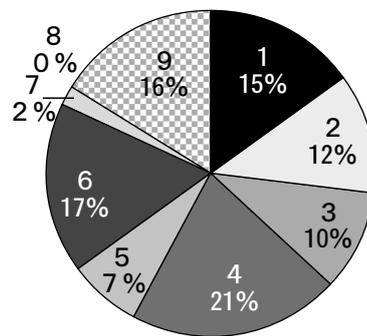
【図2】は、秋田県立図書館に所蔵されている往来物資料の状況について、目的別に分類し、その割合をグラフ化して示したものである。⑧の理数科往来の割合が突出していることに気がつくであろう。そして⑨の女子用往来と合わせると、約58%つまり6割近くがこの二種の資料で占められていることが知られる。②社会科往来資料と⑤の地理科往来資料は、所蔵が見られなかった点も注目すべき指摘事項である。

【図2 秋田県立図書館所蔵資料における目的別分類割合】



【図3】は、弘前市立図書館に所蔵されている往来物資料の状況について、目的別に分類し、その割合をグラフ化して示したものである。秋田県立図書館には⑧の理数科往来の資料が多数所蔵されていたが、一方の弘前市立図書館においては、⑧理数科往来が見られないという結果であった。最も多かったものは④の消息科往来であり、⑥歴史科往来、⑨女子用往来、①教訓科往来と続く。ただし、これら三種はあまり大差がないとみることができ、②社会科往来、③語彙科往来もそれぞれに所蔵が確認された。

【図3 弘前市立図書館所蔵資料における目的別分類割合】



このように所蔵状況について、目的別に分類してみた結果、酒田の様相と秋田、弘前では、それぞれの特性があった。ある種類の資料群が所蔵されていない場合があること、またどういった種類の往来物資料が多数所蔵されているかなど、地域による特徴が表れていた。

光丘文庫においては、163本と多数の資料が所蔵されているというだけでなく、目的別に分類した9種類のすべてを網羅して多種多様の資料が所蔵されている点が特に注目される。

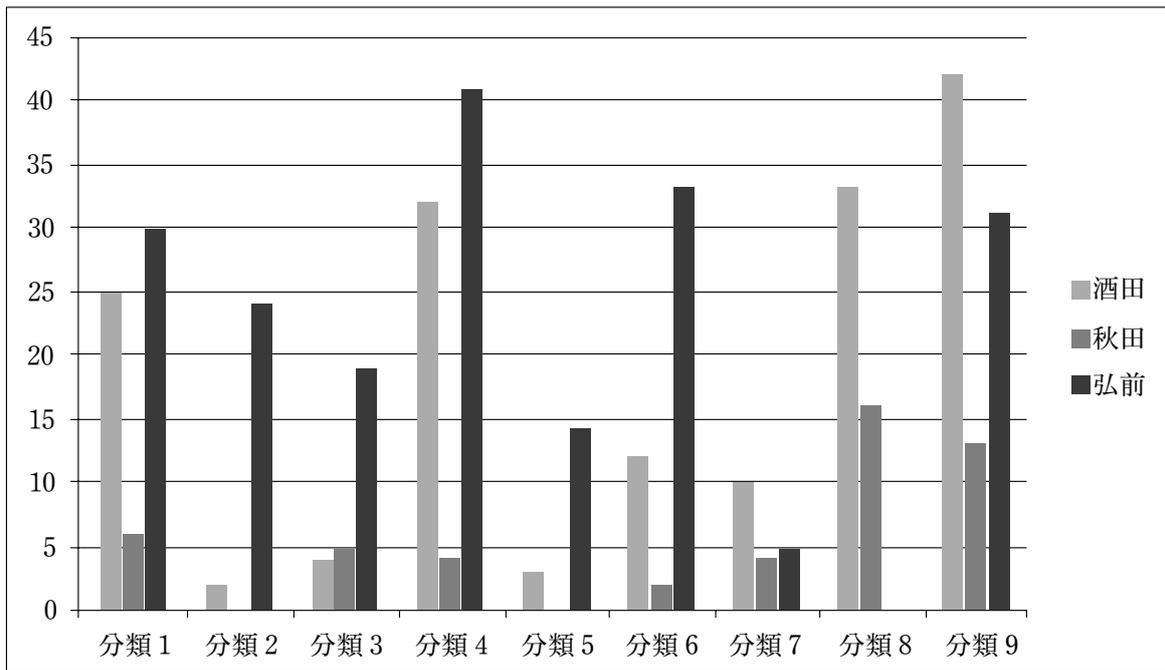
目的別に分類して検討してみた結果、資料の所蔵割合については、グラフ化した【図1】【図2】【図3】から明らかなように酒田、秋田、弘前とそれぞれの地域によって偏在があることが知り得たのである。

【図4】には、地域ごとの所蔵状況について、目的別に分類整理した資料数をグラフ化し、掲示した。より明確に所蔵の実態と偏在状況が確認できるであろう。

### 3-2 出版地別分類の状況

ここでは、資料を出版地ごとに分類して検討しておきたい。酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料は、総数163本であったが、それらの資料のうち、出版元が確

【図4 酒田・秋田・弘前の目的別分類資料所蔵数】



認できたものは125本であり、確認できない資料が38本であった。125本のうち、江戸が61本、京都が29本、大坂が34本、伊勢松阪1本であった。伊勢松阪の1本と不明のものを合わせて39本とし、大きく4つに分けて出版地についてまとめてみると次のようになる。

〔酒田 出版地別の分類と割合〕

江戸	61本	(37.4%)
京都	29本	(17.8%)
大坂	34本	(20.9%)
その他	39本	(23.9%)

江戸が最も多く61本である。次いで大坂34本、京都29本ということになる。ただし、大坂京都を関西文化圏としてまとめて考えると、63本となり、江戸の61本を上回る数になる。つまり、光丘文庫所蔵の往来物資料は、関西で出版されたものが江戸出版のものとほぼ拮抗しているといえることができる。

この状況について検討考察するために、弘前市立図書館所蔵の197本の往来物資料についての調査結果と比較してみたい。他の地域と比して、弘前の所蔵資料数が最も光丘文庫所蔵資料数と近く、傾向をみる上に有益であると考えたからである。次に示すように弘前市立図書館所蔵資料においては、圧倒的に江戸で出版されたものが多かった。

弘前に比して、酒田市立光丘文庫の所蔵資料は、京

都や大坂といった関西文化圏からの文献が多いということがいえるであろう。

〔弘前 出版地別の分類と割合〕

江戸	156本	(79.2%)
京都	20本	(10.2%)
大坂	16本	(8.1%)
仙台	5本	(2.5%)

酒田の本間家<sup>3)</sup>は、すでに寛永年間に商業を営みながら、酒田町三十六衆のひとりとして、酒田町長となり、町政に参与していた。廻船問屋として庄内、最上平野に算する米、藍、漆、紅花などを買い占め、これを大坂方面に回漕し、帰船には同地方の既製品や古着などを積み込んできて販売し、巨利を得ていたのである。光丘の代には資財を投じて、最上川の治水、酒田西浜の防砂林の植樹、天明の飢饉の救済などを行っていた。いわゆる北前船の寄港地でもあった酒田という地域は、海路で関西と非常に強いつながりがあったのである。そうした時代背景や社会背景に影響され、関西出版の文献資料が多数流入してきていた可能性が高いと思われる。

関西出版の文献資料の所蔵の多さは、こうした関西と酒田の相互交流、つまり当時の物資と文化の交流の様相を示しているとも考えられるのではないだろうか。

#### 4 資料の紹介

ここでは、所蔵資料について少し紹介しておきたい。書名を中心に述べることにし、刊年や出版地などの詳細は別稿にゆずることにし省いた。

目的別分類における①教訓科往来は、道徳を説いたもの、しつけに関するもの、金言や格言を紹介したものなど種類も多い。光丘文庫では、該当の往来物資料が25本所蔵されていた。例えば『実語教繪抄』や『実語教童子教』、『謹身往来』など当時普及していた教訓科の往来物資料が多数確認された。中国の『六論衍義』を庶民教化に役立てるように、將軍吉宗の命によって室鳩巢が編んだ官刻の往来物『六論衍義大意』も天保十四年刊が所蔵されていた。「孝順父母」「尊敬長上」「和睦郷里」など庶民の心得として当時、広く学ばれた。

『日新館童子訓』は、会津藩校の「日新館」で使用されたものと思われるが、酒田において所蔵が見られることは興味深い。また『孝之道』は嘉永六年刊のものが所蔵されているが「出羽酒田」の旗本印が見られ、これも貴重な資料といえるであろう。

②社会科往来としては、『世話字千字文』と『御成敗式目』の2本が挙げられる。『世話字千字文』は類書がかなり多いが、社会生活全般に関わる語句を集めたものである。享保二年版を最初として、明治初年まで、絵抄本、注釈本を含め多くの板種が見られるほか、改編版も数種出版されている。

③語彙科往来としては、『七いろは』『小野篁歌字づくし』など4本が所蔵されていた。『小野篁歌字づくし』は語彙科往来資料として重要なもののひとつであり、類似的対照的な語彙を一行に並べ、これに和歌を添えて記憶の便宜をはかったものである。

④消息科往来としては、『庭訓往来』系統のものが15本、それ以外に分類できる一般消息のものが17本で合わせて32本確認できた。『庭訓往来』系統には、『庭訓往来』だけでなく『庭訓往来註』なども含めて数えた。それ以外としては『風月往来』『書翰初学抄』『消息文例』などが見られた。

⑤地理科往来としては、『江戸往来』1本、『自遣往来』2本、合わせて3本であった。刊本ではなく写本であるが、『庄内往来』『酒田往来』『羽黒山詣』といった珍しい地域性あふれる往来物資料の存在が見られたことも付記しておきたい。

⑥歴史科往来としては、『本朝千字文』のほか、『正文百状揃』『泰平古状揃』など11本が確認された。『本

朝千字文』は漢字四字一句、全二百五十句一千字の「千字文」形式で神代から徳川幕府成立までの歴史を概説した往来で歴史科往来の代表的なもののひとつである。

⑦産業科往来としては、10本の所蔵が確認された。大工のための『番匠往来』、農民のための『百姓往来』、商人のための『商売往来』、町人のための『町人囊』など多彩な種類の往来物資料が確認された。【図4】からも知られるように秋田や弘前に比して、多数の産業科往来資料が所蔵されていることは注目できる点であろう。

⑧理科科往来は、一般に理学习型と算数型に分けられる。光丘文庫の所蔵状況について整理すると、算数型が21本、理学习型の物理系2本、天文系10本であった。総数としては33本である。秋田や弘前に比べると圧倒的に多数であることが知られる。秋田県立図書館には16本所蔵が確認されたが、弘前市立図書館や岩手県立図書館には所蔵が見られず、酒田光丘文庫の特異性が見られる分野であるといえよう。

所蔵資料のうち、算数型を挙げると、『塵劫記』『新編塵劫記』『改算記綱目』『算法闕疑抄』『明元算法本術』『改算記大成』など21本が確認できた。物理型としては、『気海観潤廣義』『気海観瀾』の2本、天文系としては『初学天文図指南抄』『和蘭天説』『天文図説』など10本であった。『気海観潤廣義』は、ボイス著で川本幸民訳の15巻5冊から成る物理関係の資料であるが、光丘文庫の資料は「嘉永三年刊」である。

一般に理学习型の往来物資料は少ないといわれているなかで、<sup>6)</sup> 光丘文庫の往来物資料の所蔵状況結果は興味深いものであった。総資料数からみて、理科科往来の占める割合は⑨の女子用往来に次いで大きく、20.2%にもなっている。秋田県立図書館にも多数の貴重な理科科往来資料が所蔵されていることと合わせて、これらの資料の書誌を含め、詳細な内容分析は今後の課題である。

⑩女子用往来は、42本の所蔵であった。総資料数における割合は、25.8%で最大である。酒田光丘文庫に限らず、【図4】からも明らかのように秋田や弘前でもこの女子用往来資料の所蔵数が多いことが知られる。女子用の往来物資料は、日常生活総合教科書といった体裁をとるものが多いが、各家庭で常備されて利用されてきた一面がうかがえる。

たとえば『女今川』は、女子用往来資料において最も普及したものである。貞享四年板系統と元禄十二年板系統の二種に大別されるが、江戸中期から明治期に

至るまで、250種以上の板種と20種以上の異本を生んでいる。刊行年の違うものがいくつか所蔵されていることが確認できた。他にも『女大学寶箱』『女庭訓寶種』『女教訓千代乃鶴』『繪本響の瀧』『女諸禮綾錦』『女用小倉文庫』『女用文増鏡』など多種多様のものが所蔵されていた。

女子用往来物資料には、近世期の女性に対する教育面だけでなく、当時の思想や風俗についても見るべきものが多く、貴重な資料である。

#### 4 まとめにかえて

酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料について、目的別と出版地別に分類整理し、その結果を報告しつつ考察分析してきた。今回、調査対象であった近世期の版本である往来物資料は、163本を数えたが、それらの所蔵状況をグラフ化し特徴を明示できたと思われる。

他地域の状況について概観してみると、岩手県立図書館には、近世期版本資料が6本と少なかったが、『英学七ツいろは』『挿訳英利文典』といった、貴重な英語関係の往来物資料の存在を知り得た。

弘前市立図書館は、他地域に比して所蔵往来物資料数が圧倒的に多く、197本であった。目的別分類の内訳をみると、【図3】で示したように、最も目につくのは、著名な『庭訓往来』を含む④消息科往来であった。これに次いで⑥歴史科往来、⑨女子用往来、①教訓科往来となる。しかし、これら三種は、それぞれ全体に占める割合が、15~17%とあまり大差はないことがグラフからもよみとれる。そして、多数の往来物資料を有する弘前市立図書館において、所蔵が見られない領域のものが⑧理数科往来であった。

一方で、秋田県立図書館の所蔵資料についてみると、総数50本のうち、⑧理数科往来と⑨女子用往来でその半分以上を占めていた。一般的に女子用往来は、近世期にかなりの種類が出版されていることが知られているが、理数科往来については、その時代的背景や当時の思想からの影響で、近世期の版本は少ないといわれてきた。秋田県立図書館の理数科往来資料は、『国書総目録』にも記載がない、未確認未詳の重要な文献であり、その開拓は意味のあることだと思われる。

⑧理数科往来資料の多さでいえば、今回調査した酒田市立光丘文庫においては、さらに顕著な特徴を示していたといえ、加えて光丘文庫では、京都大坂といった関西文化圏で出版された資料が多いことも興味深い調査結果であった。

文化的背景や教育環境について、また、注目すべき往来物の資料的価値や内容面からの考察検討など、残された課題について今後も研究を続けたいと思う。

#### 注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書 別巻 往来物の研究 第1輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書10巻 武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)等参照。
- 2) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)を参考とした。
- 3) 『酒田市史 改訂版 上』(酒田市史編纂、酒田市、1958年)等参照。
- 4) 石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)の「理数科往来」についての分類を参考とし、「本草・園芸関係」の資料は含まないと規定した。
- 5) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書 往来物の研究 第1輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要第103号、2010年3月)等参照。
- 6) 石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)の178~190頁参照。「理学類」の項目で「江戸時代は、自然諸科学およびこれを支える思想がじゅうぶんに発達普及しなかったから、必然的にこの方面にかかわって作られた往来の種類は少ない。」とある。

#### 付記

貴重な文献資料の閲覧許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、山形県酒田市立光丘文庫の関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

本研究は、平成23年度 科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号23520541)の研究助成による研究成果の一部である。

(2012. 1. 10受理)